普通江改修工事完遂を祝う文学作品
―金史良の新発掘資料を中心に―

布　袋　敏　博

金史良の作品が 2 点，新たに発掘された。1946 年夏，普通江改修工事完遂を祝って平壌で出された冊子『普通江　改修工事特輯』に掲載された文学作品の中に金史良の 2 作品が見られるのである。これまでも普通江改修工事と文学との関係に言及した文献はあったが，それが事実であったことが確認された。

本冊子の巻頭には，「愛国堤防」と「建国作業歌」の 2 曲が楽譜と共に掲げられているが，作詞者名，作曲者名とも表示はない。「第四部　文藝」には，金史良の詩「普通江」と戯曲「カムドルのトマト」が掲載されており，ほかに李燦の詩「流れよ普通江　新しい歴史の真ん中を」と，「リョンファリの一市民」名で時調「郷土建設」が収録されている。

金史良の 2 つの作品，およびリョンファリの一市民による時調は，初めて明らかになるものである。李燦の詩はこれまでも知られていたが，初出形が明らかになるのは初めてである。

興味深いのは，金史良と李燦の作品が歩んだ運命である。すなわち，金史良の詩と戯曲はこの冊子に収録されたあと，どこにも再録された形跡がないのに対して，李燦の詩はこの後も，李燦の詩集『勝利の記録』（1947）や『李燦詩選集』（1958），『文学新聞』1963 年 7 月 16 日号など，何度か取り上げられている。一方は発表後に再録されることがなく，他方は繰り返し収録されているわけである。それは，金史良と李燦の作品が持つ特性とそれに対する評価の違いによるものと考えられる。

1　はじめに

金史良の作品が 2 点，新たに発掘された。というと，日本語による作品を思われるかもしれないが，そうではなく，朝鮮語による未発掘の作品なのである。それも，思いがけないところから見出された。もっとも，よくよく考えれば，あとで見るように，それは決して「思いがけないところ」ではなかった。

金史良については，これまで，主として日本において，論じられ，また資料の調査・発掘などもなされてきたと言っていいだろう。それは，実質的な文壇デビューが日本であったこと，そしてその作品が芥川賞の候補になったことをきっかけに，日本での日本語による作品発表が活発になり，2 冊の日本語作品集を出したこと，さらに，旧制佐賀

高等学校，東京帝国大学在学の時期を通じて，また上記の文学作品やそれをめぐる様々な事柄を通じて，少なからぬ友人，知人を得たことなどが大きく作用しているだろう。今回も，偶然ではあるが，日本人研究者の手によって発掘された。

今回の新資料は，1946 年夏，北朝鮮で，平壌市内を流れる普通江の改修工事完遂を祝って出された『普通江　改修工事特輯』という，133 頁からなる冊子で，発行所は「普通江改修工事完遂慶祝準備委員會」となっている。この中に，金史良の詩と戯曲が収録されているのである。この冊子そのものについては，水野直樹，谷川竜一両氏によって解説されているので，そちらにお任せするとして，ここでは，収録された文学作品について述べることにしたい。

本冊子は全五部からなり，巻頭に，「愛国堤防」と「建国作業歌」の 2 曲が，大きく 1 頁に 1 曲ずつ，それぞれ楽譜と共に掲げられている。作詞者名，作曲者名とも，表示はない。そしてその「第四部　文藝」に，金史良の作品，詩「普通江」と，戯曲「깜돌의 일년감（「カムドルのトマト」）」が掲載されている。

詩「普通江」は，タイトルの頭に‘即興詩’と付されており，「金史良」名で，末尾に「一九四六年二月[ママ]十六日」の日付がある。また「カムドルのトマト」は一幕物の戯曲で，「普通江改修工事　完遂의　祝祭劇（普通江改修工事　完遂の祝祭劇）」というサブタイトルが付されていて，こちらは「士亮」名であるが，日付は付されていない。

この第四部には，ほかに李燦の詩「흘러라　普通江　새　歴史의 한복판을（流れよ普通江　新しい歴史の真ん中を）」と，「련화리　一시민（リョンファリの一市民）」名で時調「“鄕土建設”」が収録されていて，李燦の詩には「一九四六年七月六日」の日付が付されている。

本稿では，この「第四部　文藝」に収録されたこれら文学作品について，金史良を中心にしながら考察してみたい。

2　普通江改修工事と文学

これまで，普通江の改修工事と文学の関係については，南宮満や玄秀によって言及され[1)]，またその完成を祝って書物が刊行されていることが知られていた[2)]。

1946 年 7 月 21 日，普通江改修工事完遂慶祝大会が開催され[3)]，その席で，金史良の戯曲「ヤダニのトマト」が盛大に公演されたと伝えられた[4)]。

また 7 月に刊行された『文化戦線』創刊第一輯には，この普通江改修工事も含めた，

平壌を中心とした都市改造，国土改造を称える李燦の詩「勝利의　記録（勝利の記録）」が掲載されている[5]。

これらについて，筆者は，2001 年に発表した論文「解放後の金史良覚書」[6]（以下，「覚書」とする）で言及していた[7]。その中で，『朝鮮新聞』に掲載された「出版界散歩」の記事を引用して，「未見であるが，普通江改修工事完遂慶祝準備委員会出版による『普通江』という総 134 ページの書物が刊行されている」と述べたが[8]，この『普通江』が今回発掘された本書であると思われる。本書は，ページ番号は 133 までだが，白紙頁を含めれば，総 134 頁である。

その前提で論議を進めると，『普通江』および，ここに収録された文芸作品について，下記のような問題点が指摘できるようである[9]。

（1）拙稿「覚書」注 104 で，筆者は「作品は活字化されていないようである」と書いたが[10]，これは修正されなければならない。

（2）南宮満によれば，公演された金史良の作品タイトルは「ヤダニのトマト」であるが[11]，本書収録作品のタイトルは「カムドルのトマト」となっている。

（3）本書収録の即興詩「普通江」の末尾には，「一九四六年二月一六日」とある。普通江工事は，日本の植民地支配時から始められ，解放後も引き継いで行なわれるのだが，本格的に再開されるのは，1946 年 5 月 21 日のことであり，この「1946 年 2 月 16 日」という日付とは時期的に一致しない。したがってこれは，①誤植と思われる，②間に何らかの小さな催しがあり，その際に金史良が求められて即興的に詠った，ことが考えられる。ところで，1946 年 6 月 29 日には平安南道芸術聯盟が再組織され，委員長に金史良が選ばれている[12]。そして 7 月 13 日には改修工事完遂慶祝準備委員会が組織され（指揮部徐輝（責任者），尹公欽ほか），この宣伝部に金史良が，白仁俊らとともに選ばれたことが確認できる[13]。これらのことを鑑みると，この日付は誤植で，金史良が即興的に詠ったのは 7 月のことではないかと思われる。

（4）李燦の詩「流れよ　普通江　新しい歴史の真ん中を」は，詩そのものは，1947 年に刊行された李燦詩集『勝利の記録』に収録されたので，以前から知られているものであるが，本『普通江』掲載分は今回初めて紹介されるものである。なお，上述したように，この詩の末尾には「一九四六年七月六日」の日付が付されている。そして作品は，本冊子『普通江』のほか，『正路』1946 年 7 月 25 日号第 2 面にも

掲載されている。冊子の表紙には「1946. 7」の数字が見られるが，冊子には 8 月 10 日の文書も含まれている。それらを考慮すると，実際に発行されるにいたった時期は，1946 年 8 月の中旬以降のことと思われる。したがって，発行日だけを考えれば，初出は『正路』であるといえるかもしれない。

(5)「リョンファリの一市民」名で発表された時調「“郷土建設”」も全くの初出である。この作者について，水野直樹は，平壌市蓮花里に置かれた慶祝委員会の近くに住む人物，あるいは慶祝委員会（または北朝鮮芸術総聯盟）の関係者だったかもしれない，と推測している（水野直樹・谷川竜一論文，参照)。

(6) 玄秀は『赤治六年の北韓文壇』で，この改修工事を期限前に完遂させるため，あらゆる方法を用いて工事の必要性を力説して，工事に熱誠的に参加し成果をあげた個人を広く宣伝したが，「その宣伝方法の一つとして文人たちが動員された。そうして，金朝奎，閔丙均，李貞求，李燦，朴世永らが作品を書いた。これらが集められ，後日アンソロジー「普通江」となった」と述べているが[14]，本稿で見たように，本書『普通江』に収録されているのは，金史良と李燦，そしてリョンファリの一市民の作品である。

これらのうち，(2) については，慶祝大会で上演された際のタイトルは「ヤダニのトマト」であったが，冊子にする時に「カムドルのトマト」と改題したことが考えられる。

また (6) について，玄秀が述べている内容は，解放 1 周年紀念詩集『巨流』のことではないかと思われる。名前の挙がっている金朝奎，閔丙均，李貞求，李燦，朴世永はみなこの『巨流』に含まれており，玄秀はこれと混同しているのではないか[15]。彼は，注 1) で触れたように，朝鮮戦争中，1951 年の「1・4 後退」時に越南して，直後の 1952 年に『赤治六年の北韓文壇』を刊行した。資料類は当局が準備したものだろう。それに記憶を加えているわけである。その中で述べられているのは 6 年前の事ではあるが，その 6 年の間には，戦争や越南など，大きな出来事，場所の移動があった。記憶に混同があっても不思議ではない。

以上，今回の新発掘資料と関連する資料，記事等について検討したが，普通江改修工事と関係すると思われる作品は他にも見受けられる[16]。解放直後当時の作品として，筆者の知る限りでは次のとおりである。

〇金朝奎：詩「生活의 흐름（生活の流れ）」，『朝鮮新聞』第 80 号，1946 年 6 月 23 日付[17)]

〇李燦：詩「勝利의　記録（勝利の記録）」，『文化戰線』創刊第一輯，北朝鮮藝術總聯盟，1946 年 7 月[18)]

〇鄭青山：詩「突擊의 발자욱 소리（突擊の足音）－一九四六．七．六－」，解放一週年紀念詩集『北風』収録，北朝鮮藝術總聯盟，1946 年 8 月 15 日

3 『普通江』に掲載された作品について

この冊子の「第四部　文藝」に収録されている作品を掲載順に掲げれば，以下のとおりである。

即興詩　普通江　　金史良（1946 年 2 月 16 日）
詩　흘러라　普通江　새　歴史의 한복판을
（流れよ　普通江　新しい歴史の真ん中を）　李燦（1946 年 7 月 6 日）
時調　“郷土建設”　련화리　一시민（リョンファリの一市民）
戯曲　「깜돌」의 일년감（普通江改修工事　完遂의　祝祭劇）
（「カムドル」のトマト（普通江改修工事　完遂の祝祭劇））　士亮

詩「普通江」は，タイトルの頭に‘即興詩’と付されており，「金史良」名で，末尾に「一九四六年二[ママ]月十六日」の日付がある。また「カムドルのトマト」は一幕物の戯曲で，「普通江改修工事　完遂의　祝祭劇（普通江改修工事　完遂の祝祭劇）」というサブタイトルが付されていて，こちらは「士亮」名であるが，日付は付されていない。

また李燦の詩には「一九四六年七月六日」の日付が付されているが，련화리　一시민（リョンファリの一市民）の時調には日付はない。

戯曲の作者「士亮」は金史良のことで，彼は解放前からこのペンネームを使用しており（改めて言うまでもなく，金史良の本名は「金時昌」で，「金史良」名自体がペンネームである），解放後も，『文化戦線』第一輯～第三輯（1946 年 7 月～47 年 2 月）に戯曲「トボンイとペベンイ」を「士亮」名で，また，解放一周年紀念として 1946 年 8 月 15 日に刊行された『金日成将軍讃揚特輯　われらの太陽』には，戯曲「雷聲」を「金士亮」名で発表している。

「（金）士亮」名で発表された 3 つの作品が，いずれも戯曲であるのが特徴的であるが，金史良が何か意図してこうした名前の使い分けをしているのかどうかは不明である。

この金史良の 2 作品については，項を改めて論じることにして，まずここでは李燦と一市民の作品について触れておきたい。

3.1　時調と李燦の詩

時調作品は今回初めて明らかにされるものである。また李燦の詩は，この後，1947 年に平壌で出版された李燦の詩集『勝利의　記録（勝利の記録）』に収録されたものがすでに知られているが，冊子『普通江』所収版が明らかになるのは今回が初めてのことである。

時調も，李燦の詩も，短いものなので，以下に全文訳出して紹介したい[19]。

時調「郷土建設」

蓮花里一市民

わたしのシャベル　わたしの荷物が
　民主朝鮮建設だ
奴(ノムドゥル)らの「報国隊」も
　奴(ノムドゥル)らのためにしていたことだが
わたしがどうして郷土建設に
　血と汗を惜しむだろうか

いざ行かん　同務(トンム)たちよ
　普通江の堤防を築こう
民主朝鮮の城を築いて
　民主ソウルを死守しよう
愛国情熱をひとつにして
　民主課業を実践しよう

新朝鮮を創造する

　われらは建設者
反動分子を粉砕する
　われらは先鋒隊
いざ行かん　同務(トンム)たちよ
　力を惜しんでどうするのか
（終）

◇　◇　◇

　詩
　　流れよ　普通江　新しい歴史の真ん中を
　　（흘러라　普通江　새　歴史의 한복판을）[20]
李　燦

ひと筋伸びた柳の影もなく
赭土だらけの痩せこけた山野をうねり
ありふれた生活の朝夕も　一日のうららかな波も知らずに
屈辱の西京のなかを這うように流れていた鬱憤の江よ

夏も三伏[21]の頃になると
いつも干上がった　お前の川すじを水浸しにして
何度も
荒らし尽くした恐ろしい水魔！
ああ　哀れな同胞たちの九天[22]に染み入る慟哭の中に
地団太を踏み黄土の水を噛んでいたお前の心をわたしは知っている

ああ　今日誰がお前に肥沃な眺望を授け
ああ　今日何がお前に浩濶な心と
万年の城砦をもたらしたか？

記憶しよう　その名を

記憶しよう　その力を
その名は真のこの地の光　この地の太陽
その名のあるところ　暗黒は去り
その名のあるところ　光明が訪れ[23)]

ああ　その力は人民の力　ひとえに人民の力
（その力は老人も婦女子もすすんで団結した力！）[24)]
その力はわずかふた月をなお半月縮めて[25)]
その力は連日の暴雨にも漆黒の夜にも屈することはなかった

ああ　輝くその名とともに
偉大なるその力とともに[26)]
流れよ！　普通江[27)]

流域千里に五穀を実らせ
七月蒼空に人民の凱歌も高く
さあ　ひとつの確固たる指標　民主建設の揺るぎなき指標として
ああ　開かれゆく祖国の新たな歴史を！　新たな歴史の真ん中を[28)]
（一九四六年七月六日）

それぞれの作品を簡単に見てみよう。

李燦の詩では，かつて普通江がどのように被害をもたらしていたかが謳われ，それがこの度の改修工事によって，洪水が防がれ，流域千里に五穀を実らせるようになった。しかもそれは工期を短縮してのことで，それもひとえに人民の力によるものであると，人民の労苦を称えている。この詩は，本冊子『普通江』のほか，『正路』1946 年 7 月 25 日の第 2 面にも掲載されている。宣伝効果があると認められてのことであろう[29)]。

さらに言うなら，この李燦の詩は，李燦最初の個人詩集『勝利의　記録（勝利の記録）』（文化戦線社，1947）に再録され，改作されて『李燦詩選集』（朝鮮作家同盟出版社，1958）にも収録されたのち，1963 年には『文学新聞』1963 年 7 月 16 日号にも掲載されている[30)]。

なお，こうした「改作問題」（これは李燦に限るものではない）や，改作作品が発表

された 1958 年，59 年という時期については，別途取り上げて論じられるべき課題と思われる。

また，「蓮花里一市民」による時調は，そうした普通江の堤防を築きに行こうと，人民を鼓舞・扇動する内容となっている。なお，この作者が誰であるかは不明であるが，ある程度の教育を受けた人物であると考えられる。

3.2　金史良の作品

筆者は，2001 年に発表した論文「解放後の金史良覚書」[31]で，それまで知られていた金史良の解放後の作品が，小説 5 篇，戯曲 2 篇，ルポルタージュ 7 篇だったのに対し，「解放後に発表，あるいは活字化されたものとして，少なくとも，7 篇の小説，7 篇の戯曲や朗誦劇・歌劇，12 篇のルポ・評論・随筆（紀行文含む），1 篇の書評などが存在することが判明した」（同上，p.135）と明らかにした[32]。さらにその後の調査の結果，壁小説「괄삭둥이（うすらとんまな童）」（『朝鮮新聞』第 4 号，1946 年 2 月 20 日付）が発掘された[33]。したがって，解放後に書かれた小説は 8 篇となる。そこへ今回新たな資料として，詩 1 篇，戯曲 1 篇が発掘されたわけである。これにより，戯曲や朗誦劇・歌劇は 8 篇となった。

金史良の詩作品は珍しく，解放前に，『東亜日報』『毎日申報』『東光』等に投稿された朝鮮語詩（童謡）と，佐賀高等学校時代，学内誌に発表した日本語詩があり[34]，また東京帝国大学在学中に，同人誌『堤防』第 4 号（1937 年 3 月）に発表した日本語詩「奪はれた詩」[35]があるだけで，いずれも習作というべきものだった。一方，解放後に発表された詩は，現在判明している限り，今回発掘された作品が唯一のものである。

これに対し，戯曲は，解放前には具体的な作品こそ残していないが，佐賀高等学校時代から金史良が関心を寄せていたジャンルである。そして解放後には，小説やルポルタージュと並んで金史良作品の中心をなすことになった。これは，識字教育を受けていない国民が多かった解放直後の北朝鮮で，新しい社会主義体制を基盤とした思想を知らしめるのに，話し言葉と視覚で組み立てられる演劇という形式が有効であったことを表わしているだろう。

さて，解放後に発表された金史良の作品は，そのほとんどが国家的事業，法令等と密接に結びついた，プロパガンダ的な性格の強いものだが，これは金史良に限らず，他の文学者も同様である。今回も，普通江修復工事と関連のある作品となっている。

ところで，金史良は，解放直後からここまでにいたる短い間にも，いくつか作品を発

表している。この 2 作品を検討する前に，それらについて簡単に触れておきたい。

4　解放前後の金史良の行動と作品活動

4.1　解放前後の金史良

金史良は，「光の中に」が 1940 年上半期の芥川賞候補作になったことで一躍脚光を浴び，活発な活動を繰り広げて，同年 12 月 10 日には，日本語による第 1 小説集となる『光の中に』を小山書店から刊行する。しかし時局は悪化し，1941 年 12 月 8 日には太平洋戦争が始まるが，その翌 12 月 9 日未明には，金史良は予備検束されて，鎌倉警察署に拘禁され，「南方軍についてまわりながら『皇軍』をたたえ，戦捷を報道する」[36]よう強要された。これを拒否した金史良は，年が明けた 1942 年 1 月 29 日にようやく釈放されるが，前年 1941 年 11 月に朝鮮で創刊された『國民文學』[37]の第 2 巻第 1 号（1942. 1）に，日本語作品「ムルオリ島」を発表する。あるいはこれが釈放の条件だったのかもしれない。なお，同号には，韓雪野の「血」と兪鎮午の「南谷先生」（いずれも日本語による短篇）も掲載されている。

こうした状況下で，1942 年 2 月に金史良は平壌に帰ることになるが，これは実質的に強制帰還＝追放だった。同年 4 月 20 日には第 2 小説集『故郷』を甲鳥書林から刊行するが，情勢は悪化の一途をたどり，1943 年 3 月には徴兵制と海軍志願兵制度が公布され，8 月 1 日から施行される。そしてそれにあわせて，金史良は，8 月 28 日から 9 月 13 日まで，国民総力朝鮮聯盟により海軍視察団の一員として「内地」を視察し，その「報告書」として，朝鮮語紙『毎日新報』にルポ「海軍行」（1943 年 10 月 10 日～23 日）と長篇小説「海の歌」（1943 年 12 月 14 日～1944 年 10 月 4 日）を連載することになる。

金史良は，こうした，自らの意にそわぬ執筆をしなければならない環境から逃れるべく，1945 年 5 月に，「在支半島出身学兵」慰問の一員として中国に赴く途中，延安方面に向けて脱出を試みる。結果として，延安までは行けず，途中の太行山中で八路軍に合流し，そこで解放を迎えるのだが，ここでの経験は，金史良にとって大変に大きかったようである。八路軍とともに生活する中で，徹底的に思想改造もなされたようで，解放後，新しい政治体制のもとでの作品活動等のあちこちに，その痕跡が見られる。たとえば，朝鮮戦争が始まる直前，1950 年 4 月に，久々に小説を『文学芸術』第 3 巻第 4 号に発表するが，そのタイトルは「隊伍は太陽に向かって」となっている。この表題名は，おそらく，「八路軍行進曲」の歌詞の一節から採られていると思われる。解放後の

新生北朝鮮での生活もすでに4年半になろうかというこの期にあって，そしてその短い生涯のほぼ最後の時期にあって，なおかつ，創作の，表題とはいえ手がかりとしたのが，かつて自らが身をおいた中国八路軍と関係するものであったということは，金史良にとって太行山での生活体験がいかに大きいものであったかを，如実に物語っている。

現在まで明らかになっている金史良の，解放直後の作品群は，構想時期も含め時系列順に記すと次のようである。

1945年6月25日：華北太行山　中朝洋軍政学校倶楽部で，戯曲「ポットルの軍服」を脱稿。

7月7日：華北太行山中の朝鮮独立同盟で，戯曲「胡蝶」を稿了。

8月11日：日本の降伏を太行山中で聞いたという。

（1945年8月15日：日本の敗北，朝鮮の解放）

12月10日：平壌から，「党の委任を受け」鉄原，浦川を経て三八境界網を越え，李箕永，韓雪野，韓載徳らとともにソウル入京。

12月12日：雅叙園で南北の文学者による座談会開かれる。座談会は二度開かれるが，この一度目の会には金史良は参加していない。

12月末：鳳凰閣での座談会に出席。李泰俊と，日帝末期の日本語での作品発表について論争する。

このソウル滞在時，ソウルで出ていた雑誌『民聲』の「編集子につかまり」生活篇「山寨譚」2回分を急いで書いて渡し，続稿は北朝鮮に帰ってから送ると約束する。また，村山知義らと会い，旧交を温める。

1946年1月　：「延安亡命記」の連載が，『民聲』第2巻第2号から始まる。これは，第3回目から「駑馬萬里－延安亡命記－」と改題され，1947年7月の『民聲』第3巻第5・6号まで，9回にわたり掲載されるが，南朝鮮の社会情勢の変化により，以後掲載が中断される。

1月5日～12日：戯曲「胡蝶」が楽浪劇会・全線の合同公演としてソウルの大劇場で行われる。

3月1日：戯曲「胡蝶」を平南芸術聯盟で修稿。

戯曲「ポットルの軍服」が，南朝鮮で出ていた『赤星』創刊号

に掲載される。

3 月 5 日：「土地改革法令」公布，15 日から実施。

3 月 10 日：朝鮮共産党北朝鮮分局宣伝部主催による「北朝鮮芸術家会集座談会」に出席。

3 月 25 日：北朝鮮芸術総聯盟が結成され，結成大会で金史良は経過報告を行なう。ここで金史良は，執行委員および常任委員の国際文化局長，そして芸術委員会のメンバーに選任される。

3 月 28 日～4 月 23 日：三一劇場で開かれた，平南芸術聯盟主催の北朝鮮演劇コンクールに，審査員として出席。

5 月 21 日：普通江改修工事が再開される（この工事自体は植民地時代に始められている）。

6 月 29 日：平安南道芸術聯盟が再組織され，委員長に選任される。

7 月　　：戯曲「トボンイとペベンイ」第一幕，第二幕を「士亮」名で，『文化戦線』創刊号に発表。以後，同誌第 2 号（1946. 11），第 3 号（1947. 2）に第三幕～第五幕を発表する。この作品も太行山中で構想されたものである。

7 月 6 日：労働法令実施記念の「慶祝芸術の日」の行事の席でコント朗読。このコントがどういうものであったかは不明である。金史良自身，1948 年に刊行された創作集『風塵』（朝鮮人民出版社）の「あとがき」で，労働法令が発表されたとき，それにちなんで書いたのが「チャドルの汽車」だと述べているから，このコントはその原形であったことも考えられる。

7 月 12 日：普通江改修工事完遂慶祝大会を準備する慶祝委員会が組織される。

おそらく，この日あたりから 7 月 20 日あたりまでの間に，7 月 21 日の普通江改修工事完遂慶祝大会の席で発表する即興詩「普通江」や戯曲「ヤダニのトマト（カムドルのトマト）」を創作したと思われる。もちろん，戯曲は，分量もあることから，5 月 21 日の工事再開のころから少し時間をかけて構想されていたと推測できるが，即興詩はこの短い期間に作られたのではないかと考えられる。

7 月 21 日：普通江改修工事完遂慶祝大会の席で「ヤダニのトマト（カムドルのトマト）」が公演される。

8 月 15 日：戯曲「雷聲」を「金士亮」名で，8・15 解放一周年紀念として刊行された『金日成将軍讃揚特輯　우리의 太陽（われらの太陽）』に発表。

戯曲「胡蝶」を，8・15 解放一周年紀念刊行物の一つとして発刊された『戯曲集』に発表。

以上からわかるように，解放後，金史良の作品がまず活字化されたのは，南朝鮮でのことである点，興味深い。これは，1945 年 12 月に，「党から委任されて」，南北文学者による会合に出席するため，38 度線を越えてソウルに入京したことによるもので，いわば偶然が作用していることになる。

また，発表された作品は，いずれも解放直前，太行山中で八路軍と行動を共にしていた時に構想されたもの（「ポットルの軍服」「胡蝶」），またその時の生活記（「延安亡命記」）である。その後，北朝鮮に帰って作品を発表するが（「トボンイとペベンイ」），その作品も同様である。つまり，最初に発表された作品群は，みな太行山中で構想されたものということになるが，これは当然といえば当然である。そして北朝鮮で法令や体制が整備されるにつれて，それらに添った内容の作品を発表していくことになる。それがこの普通江改修工事完遂を慶祝する戯曲「ヤダニのトマト（カムドルのトマト）」や即興詩「普通江」であり，直後の解放一周年紀念作品集『われらの太陽』に収録された戯曲「雷聲」である[38)]。

もう一つの特徴的なことは，先述したことの繰り返しになるが，これらの大部分が戯曲であるという点である。おそらくは太行山中で構想されたものは，そこで即興的に演じられもしたものだっただろう。そして解放直後の北朝鮮社会にあっては，識字教育を受けていない多くの民衆に対して，視覚に訴える演劇という形式は有効なものであっただろうし，社会主義という新しい社会体制を教育するのにも，有用な形式であったはずである。

4.2 『普通江』所収の金史良作品

4.2.1「即興詩　普通江」について

まず，「即興詩　普通江」をみてみよう。全体は 5 連に分かれ，総 55 行に及ぶ。李燦

の詩が 26 行であるのに比べ，倍以上の分量である。本稿末尾に原詩と試訳を掲載した。

この詩の問題は，末尾の日付である。注 25）に記したように，工事は，当初 5 月 17 日から，76 日間をかけて 7 月 31 日に終えることになっていたが，実際には，少し遅れて 5 月 21 日に始まり，工期は逆に少し短縮されて，7 月 15 日に終了した。そして 7 月 21 日には普通江改修工事完遂慶祝大会が催され[39]，そこで金史良の「ヤダニのトマト」が盛大に公演されたのである[40]。上記の詩の日付は，それらのいずれにも該当しないが，本稿 2 の（3）に見たように，これは誤植であると考えられる。

この詩は，「シャベル」を象徴的なキーワードとしながら，普通江を擬人化し，シャベルを持った人民が普通江に語りかける形になっている。日帝下での悲惨な生活相を描きながら，名を呼ぶだけでも恨多い普通江に，しかし今日からは，ため息と涙の歴史を閉じ，幸福な普通江になるのだ，祝福されたわたしのシャベルを受けよ，と語りかけている。

4.2.2　戯曲「깜돌」의 일년감（「カムドル」のトマト）について

もう一つの作品である戯曲「깜돌」의 일년감（「カムドル」のトマト）[41]は，作者名は，解放前から金史良が使ってきたまた別のペンネーム（「金史良」自体がペンネームである）「士亮」となっており，また（普通江改修工事　完遂의　祝祭劇）とサブタイトルが付されている。一幕物で，収録された冊子で 104 頁から 121 頁に掲載された分量の作品である。

舞台には以下のような「字幕」が出て，今回の普通江修復工事のあらましを示し，それを背景に，堤防の土幕に住む貧しい人々の生活相を描きながら，台詞の端々に，「労働法令」や「6 時間労働」，「男女平等」などの単語をはさんで，新時代の到来を示している。

> われらが民主主義北朝鮮は，第一次の偉大なる建設工事の成功により自然との戦いに勝利した。千年の病痛であった普通江の水を迂回させ，堤防を塞ぎ，われわれの栄誉たる首都・平壌の防衛を保障したのだ。倭奴（ウェノム）の強制徴用でも三年掛かりとされていたこの工事を，われらが首都 40 万の市民は，実に 55 日という短期間で，自主的に完遂したのだ。隣郡の農民たちの応援も涙ぐましい。延べ人員 58 万。［近藤友梨訳］

内容を要約すると次のようである。

ときは 1946 年 7 月中旬，場所はピョンヤン市西部にある土城廓。そばを普通江が流れている。川沿いに土城が築かれ，その中腹の土幕に住む人々。

登場人物は，オモニ（50 歳），末息子のカムドル（12 歳），同じく息子で旋盤工のチャドル（15 歳），その友人で隣に住む，やはり旋盤工のカクスェ（18 歳），馬夫のアチュル（27 歳），その妻ケルラン（25 歳），カクスェの従妹ポビ（16 歳）。

土幕は畝でぬかるんでいる。中ではオモニが床に臥せっており，カムドルがしゃがんでいる。枕元にはトマトが二つ。これをめぐってまず物語は展開する。

オモニはカムドルを叱っている。カムドルは 3 円のトマトを二つ買ったが，一度もトマトを食べたことのないオモニのことを思い，もう一度戻って 5 円のトマト二つと交換することにした。しかしやり口が問題だった。さっき支払った 6 円に，このトマト二つが 6 円だから，都合 12 円になる。だから 2 円返してもらおうというのだ。この論法に，算術に弱いアチュルや周りの男たちは頭がこんがらがるが，アチュルの妻のケルランだけは騙されず，不足分を取りに来る。こうしたところは，落語「壺算」を思わせるような話である。

そうした人々のやり取りの中に，労働法令やら，6 時間労働，男女平等，算術や文字の習得，男女平等などの単語がちりばめられているのだが，それらをしかつめらしく説教めかして出すのでなく，言葉の意味も分かっているのやらおぼつかない登場人物に語らせているところなども，金史良らしいところである。

一方，雨の中，夜を明かして最終突撃をした。15 歳のチャドルは，労働法令上 6 時間労働だが，すでに 17 日も出ており，徹夜ももう 4 度目だ，幼いのに夜間も働かせる。12 歳のカムドルは，契約書もなく 5 日間も働いたことなども明かされ，実態がどうであったかを窺わせる場面もある。

しかし，梅雨で大洪水になったが，今回は堤防を築いていたので被害はなかった，金将軍は名人だと述べたりもする。喧嘩の最中には，互いに「金九の息子」「李承晩の嫁」などと悪口を浴びせる。

どたばたしているところへ，ポビが籠を下げて訪ねてくる。大雨でおじのカクスェの家が無事か案じてやってきたのだ。カクスェが逆に，梅雨になるといつも水浸しになっていたポビの家の安否を尋ねると，ポビは笑いながら，うちの村人も近くの村人たちも，みな堤防のおかげだと感謝していることを告げ，普通江工事による堤防のお

かげで，一度も水に浸ることもなく，拳のような大きなトマトが鈴なりになったと，持参したトマトを皆に差し出す。

さらにまた，現物税ができ，畑でとれたものを，2 割 5 分だけ国に納めて，あとは全部農家の好きなようにできる法ができたみたいだと教える。

そうした中，夜通し最後まで一緒に堤防を築いていた労働英雄がひとり川を渡る途中でなくなるという事故があったことも明らかになる。

しかしそうした犠牲を払いながらも，この度の改修工事で，人々は大きな恩恵を受けていることが示される。

陽が昇ってきた。そろそろ梅雨も終わりだ。

金史良は，急ピッチで国家建設がなされていく中で，1946 年 3 月の「土地改革法令」（5 日公布，15 日実施）については，短篇「馬息嶺」を，6 月の「労働法令」発布については，戯曲「チャドルの汽車」を書いている。そして，普通江改修工事の完遂にあたって，この戯曲「カムドルのトマト（ヤダニのトマト）」を発表しているわけである。

これらの作品に共通するのは，題材となる国家的事業（法令や工事）に対して，正面から賛美，礼讃するのではなく，人々の日常生活を描きながら，その中に主題と関連するような単語等をちりばめて，暗示するような表現を取っていることである。戯画化していると言ってもいいかもしれない。金史良は，友人であった村山知義や金達壽らの回想によると，様々な事柄を，おもしろおかしく脚色して演じて見せることがままあったという。それが彼の本質的な姿だったのだろうか。上記のような作品の描写も，それが成功しているか否かは別として，彼の本質に根差したものだったのかもしれない。

しかしながら，そうした点が後に批判の対象となってくる[42)]。この「カムドルのトマト」がこのあと，個人作品集や各種作品集を問わず，どれにも再録されていないのはそのためかもしれないと思わせもする（対照的に，同じく普通江修復工事完遂を記念して謳った李燦の作品は，本稿でこれまで見てきたように，以後，数度にわたって個人詩集やアンソロジーに取り上げられている）。

4.2.3　小説「土城廓」（金史良）および戯曲「土城廓」（韓泰泉）について

金史良が戯曲「カムドルのトマト」の舞台としているのは普通江工事現場周辺の貧民窟で，そこでの人々の生活相を描いているわけだが，同じように貧民窟を舞台として描いている作品として，われわれの脳裏にすぐ思い浮かぶのは，同じ金史良の作品「土城

廊」である。こちらは戯曲ではなく，小説である。

「土城廊」は最初，1936 年 10 月，同人誌『堤防』第 2 号に，「具岷」のペンネームで発表されたもので，後に改作して，『文藝首都』1940 年 2 月号に発表された。この改作されたものが，彼の最初の作品集『光の中に』（小山書店，1940. 12）にも収録された。今日よく知られているのはこちらの改作版で，河出書房新社版『金史良全集』にもこれが収録されている（第Ⅰ巻，1973）。この作品について，金史良は，最初の日本語創作集『光の中に』（小山書店，東京，1940）の「あとがき」で次のように述べている。

「「土城廊」は私の一等最初の作品で名實共に處女作と云へよう。高等學校二年の時に書いてゐながら，言葉に自信が持てず机の奥にひつこめてゐたのを，東京の大學へ出て來て同人誌「堤防」へのせて好評を得た。それは本書所載の内容とは大部違ってゐて，そこには社會に對する私の激しい意慾や情熱も幾分活寫されてゐたやうであるが，後で「文藝首都」へ再録するにあたって大改訂に及んだのである。「箕子林」も同系列に属する滅ぶ者への哀愁ではあるが，（以下略）」

この回想文から，「土城廊」が事実上，金史良の最初の作品であること，佐賀高等学校二年時に書いていたが，その日本語に自信が持てずに，机の奥深くしまい込んであったこと，東大に進み，同人誌『堤防』を始めた際にそれを掲載したこと，しかしのちに『文藝首都』に再録するとき，大幅に訂正を加えたこと，などがわかる。

字数にすると，改訂版（『文藝首都』版）は，初稿（『堤防』版）の約 10 分の 9 で，検閲を考慮して 1 割ほどが削られている。1 割といえば相当な量で，それだけの分量を削れば，不具合が生じるものであるが，通して読んで，そうした箇所には気づかない。つまり，金史良自身，そうした状態を好まなかったのか，当局が，検閲跡を残さぬよう指示したかであろうが，いずれにせよ，問題となる単語や表現を削った上で，表面上は削除したことがわからぬように，再度，実質的に書き直したのではないかと思われる。

しかし，その結果，土城廊住民，すなわち，「滅ぶ者」のその原因と深く関わっている日本人を描写した部分が欠落し，また改ざんされて，せっかくの題材が活かされず，日本の朝鮮植民地支配ということがぼやかされてしまうことになっている。

短篇「土城廊」のあらすじは次のようである。

もと奴婢だった元三は，両親も奴婢だったが，主家が没落して「始めて自由な身

になって」世界は新しく開けた。それで，山から二十里離れた平壌にやってきたが，やれる仕事といえばチゲックン〔チゲで荷物を運ぶ日稼ぎ人夫〕だった。偶然知り合った先達に連れられて住み着いたのは土城廊の土幕だった。そこで暮らすうち，働かずぶらぶらしている先達の妻（婦）を何かと助けるのだが，先達は嫉妬する。

土幕の中はじめじめしており，雨でいまにも崩れそうで，ことに先達の土幕は危なかった。元三も歳を忘れて婦に気持ちがゆき，二人で暮らせる住居を探すがうまく見つからない。先達は元三に婦を取られまいと，にわかに働こうとし，もとは下男だった炳吉という男に仕事を紹介してもらうが，重すぎる荷に押しつぶされ死んでしまう。ある日の大雨で，先達の土幕は崩れかけ，それを見た元三は婦を助けようとするが，崩れる直前，すぐ中から飛び出たのは炳吉で，婦も寸前で外に出た。元三は土幕ともども流されてしまう。

作品は自然主義文学の影響が明らかである。ただ，上述したように，タイトルとなっている「土城廊」は，小説の舞台を表わしてはいるが，背景としてそれほどうまく活かされているとはいえず，貧民窟の実態，そこに住む住人を十分に描けているとはいいがたい。当然に，検閲があった点を勘案しても，自然主義文学の亜流にとどまっていることは否めない。しかしこの作品の執筆経験が，同じく貧民窟を舞台とした戯曲「カムドルのトマト」を書くのには役立っているのではないか，と思われる[43)]。

平壌の土城廊を舞台に作品化したものとしては，もう一つ，韓泰泉の戯曲「土城廊（토성랑）」がある。これは，1935 年の『東亜日報』新春文芸戯曲部門の当選作で，同紙 1 月 11 日～23 日の夕刊に，10 回にわたり掲載された。作者の韓泰泉は 1906 年，鎮南浦生まれで，生後すぐ両親とともに平壌に移り，そこで生長した作家である。したがって，平壌の貧民窟である土城廊については，それを題材に戯曲を書くほどに，ある程度の知識があったであろうと推測させる。

この作品は，朝鮮芸術座によって，1935 年 11 月に築地小劇場で上演されたが，題名が金史良の小説と同じだったことから，安宇植が，その著書『金史良－その抵抗の生涯』（岩波新書，1972）や『評伝　金史良』（草風館，1983）で，朝鮮芸術座が取り上げたのは金史良の作品だったと書き，以後，通説とされてきた。そして続く研究もそれに従ってきているが，これは誤りである。当時この公演を報じた黄東軾の評文があり，そこには，公演の作品は「一幕物で，今春東亜日報一等に当選した戯曲　韓泰泉氏作「土

城廊」」とあるからである[44)]。

さらにまた，この時，朝鮮芸術座が築地小劇場で上演したもう一つの演目は柳致真作の戯曲「牛」であるが，この作品も，韓泰泉の「土城廊」に引き続き，「土城廊」の掲載最終回から 1 週間後の 1935 年 1 月 30 日より 2 月 22 日まで，同じ『東亜日報』紙に，舞台図入りで 20 回にわたり連載されている。それらを勘案すると，朝鮮芸術座の関係者は，これら 2 つの作品を同じ時期に『東亜日報』で目にし，レパートリーとしたのではないか，とも思われる[45)]。

韓泰泉は，その後も戯曲作家として活躍するが，解放を平壌で迎えたと思われ，そのまま北の体制下で活動を続けた。金史良と韓泰泉は，1946 年 11 月 20 日に，平壌市「歓迎」芸術家講演会食堂で開かれた「〈本社主宰現地座談会〉北朝鮮의　文化의　全貌（北朝鮮の文化の全貌）」に同席している[46)]。ここでいう「本社」とは，当時，金史良の「延安亡命記（駑馬萬里）」を連載していた『民聲』の発行所である民聲社のことである。この席で 2 人は，はたして「土城廊」をテーマにしたかつての互いの作品について会話を交わしただろうか，といったことも想像させる場面である。

4.2.4　登場人物と「名」

もう一点，この作品から考えられる問題がある。それは登場人物の「名前」である。〈チャドル〉，〈ポビ〉は，それぞれ，〈チャドル〉は小説「急ぎ足」と「チャドリの汽車」の登場人物の名であり，〈ポビ〉は「馬息嶺」の登場人物の名でもある。また，〈カムドル〉は，「チャドリの汽車」に〈カムドリ〉として出てくる。そして〈チャドル〉は，植民地末期に書かれた長篇「海の歌」にすでに〈チャドリ〉として出ている。注 43）で述べたように，この「海の歌」にはこれ以外にも，〈コブタンネ〉，〈ボットリ〉といった名前や，〈鉄吹子〉，〈ナルパラム〉といった単語が出て来，金史良が持てる材料を総動員している様子がうかがえる。

こうした現象は，バルザックを想い起こさせる。よく知られているように，バルザックは，〈人間喜劇〉という総題のもとに，膨大な作品を書き続けながら，同じ名の人物を，異なる様々な作品に登場させている。

金史良は，東京帝国大学の独文科に学んだが，旧制佐賀高等学校時代からの長い日本留学生活の間に，多くの外国文学に親しんだものと思われる。日本は，明治以降，西洋文物を受容するのに，文学では，当初は英訳や独訳を通して各国文学に接するようになるが（鴎外の『諸国物語』，上田敏の訳詩集『海潮音』など），徐々に各国言語からの直

接訳がなされていく。バルザックの作品も，1924 年には，のちにバルザック研究の第一人者となる水野亮による『バルザック小説集』（春陽堂）が出ているし，金史良が東京帝大で学んでいた 1930 年代半ばに，16 巻本の『バルザック全集』が河出書房から刊行されている。金史良もこれらを目にしている可能性はある。

こうしたことを考え合わせると，金史良は，新しい北朝鮮社会の全体相を，様々な作品で描こうとしていたのかもしれないと思わせられもする。もう少し生きていたら，と思わずにはいられないが，いずれにせよ，そうした意図の有無も含めた分析はこれからの課題である。

また，これら以外の作品でも，たとえば「トボンイとペベンイ」や「ポットルの軍服」,「팔삭둥이（うすらとんまな童）」,「急ぎ足」などの作品の登場人物名も，その語源を推し量ると，大変興味深く思われる。今回新発掘された「カムドルのトマト」も含めた，作品の登場人物の「名前」に関する分析も同様に今後の課題としたい[47)]。

5　むすび

以上，今回新発掘された冊子『普通江』に掲載された文学作品を，金史良の作品を中心に見てきた。整理すると次のようである。

これまで玄秀『赤治 6 年の北韓文壇』や南宮満の談話などにより，普通江改修工事完遂を祝って書物が刊行され，その慶祝大会が開催されていることが知られていた。それが今回の冊子の新発掘によって確認できたことになる。内容を見ると，玄秀が伝えていた内容が，玄秀の記憶違いであったこと（玄秀が言っている内容に一致するのは，『普通江』というアンソロジーではなく，詩集『巨流』だった），実際には，冊子の「第四部　文藝」に，金史良の即興詩「普通江」と戯曲「カムドルのトマト」，李燦の詩「流れよ　普通江　新しい歴史の真ん中を」，そして「リョンファリの一市民」名で時調「“郷土建設”」が収録されていることが明らかになった。

これらの作品中，李燦の詩は，1947 年に刊行された李燦の個人詩集『勝利の記録』に収録されている同作品が知られており，詩そのものはまったく初めて明らかにされるものではないが，その初出と思われる本冊子収録版が明らかになるのは今回が初めてである。そして金史良の 2 つの作品，およびリョンファリの一市民による時調は，今回の発掘によりまったく初めて明らかになるものである。

作品の内容は，工事の様子や，当時の北朝鮮社会の一断面をよく示している。また，

工事は植民地期から行われてきたものであるが，金史良の戯曲「カムドルのトマト」の背景となっている普通江工事現場周辺の貧民窟を舞台とする作品として思い浮かぶのは，植民地時代に書かれた同じ金史良の作品「土城廊」（短篇小説）や韓泰泉の同名の戯曲「土城廊」である。そうした意味で，工事ばかりでなく，文学史的にみても，植民地時代からの連続性を示すものであるといえる。

興味深いのは，金史良と李燦の作品が歩んだ運命である。すなわち，金史良の詩と戯曲は，この冊子に収録されたあと，金史良自身の創作集『風塵』（1948）や，各種のアンソロジーにも再録された形跡はないが（そしてリョンファリの一市民の時調も），李燦の詩は，この後も，李燦自身の詩集『勝利の記録』（1947）や『李燦詩選集』（朝鮮作家同盟出版社，1958），『文学新聞』1963 年 7 月 16 日号など，何度かにわたって取り上げられている。

この点に関しては，金史良が，36 歳という若さで亡くなったため，活躍した時間が短かったのに対し，李燦は 1974 年に死去するまで長く北朝鮮文壇で活動したので，同じ作品が繰り返し取り上げられたという見方も出来るかもしれない。しかし，金史良が生きた同じ時間幅で比べてみると，違いがはっきりと浮き彫りになる。

金史良は生前，延安亡命記『駑馬萬里』（1947）と，創作集『風塵』（1948）を刊行しているが，この『風塵』に収録された作品は「馬息嶺／チャドルの汽車／ポットルの軍服／トボンイとペベンイ」であり，ここには冊子『普通江』に掲載された作品は含まれていない。

これに対し，1947 年に刊行された李燦の詩集『勝利の記録』には，冊子『普通江』掲載の詩「流れよ　普通江　新しい歴史の真ん中を」が再掲されている。

さらにまた，金史良の死亡が確認されたあとに，その追悼集として刊行されたと思われる『金史良選集』（国立出版社，1955）に収録されているのは，「駑馬萬里／トボンイとペベンイ／南から来た手紙／われわれはこうして勝った／海が見える」である[48]。これは当局が編集したと思われるため，収録作品の選択には，いっそう当局の考えが反映されているとみなせよう。そう考えると，ここに『普通江』所収作品が含まれておらず，また解放 1 周年を紀念した『金日成讃揚特輯　われらの太陽』所収の戯曲「雷聲」も含まれていないということは何を意味するのだろうか。

一方は発表された後は再録されることがなく，他方は繰り返し収録されているわけである。ということは，それは，ここに発表された金史良と李燦の作品が持つ特性とそれに対する評価の違いによるものであり，それぞれが活躍した時間の長短によるのではな

いことを示しているといえるのではないだろうか[49]。

もう一つ考えてみるべきこととして，登場人物たちの「名前」の問題がある。金史良の作品では，登場人物の「名前」で，同じ名前が異なる作品に登場する例がある。これはバルザックを想起させる。あるいは，金史良は，新しい北朝鮮社会の全体相を，様々な作品で描こうとしていたのかもしれないと思わせもする。生きた時間が短かったため，充分な量の作品を残さなかったのが残念であるが，そうした意図の有無も含めた「名前」の分析も今後の課題である。

今回，新たに発掘された冊子『普通江』所収の作品は，初期北朝鮮の社会相を反映させており，それを知るのに貴重であるが，同時に，上に述べたような様々な問題も提起している重要な資料といえるだろう。

（付録）金史良「即興詩　普通江」対訳　（■■は判読不能）

1	1
うねり流れて悠久万年	구비처 흘러 悠久萬年에
お前ももどかしい四十年を	너도 서로운 四十年
涙で過ごしたことだろう――	눈물로 흘렀거니――
お前の背中ほどのところに土幕が	네 등얹어리에 움각집
日々増えていき	나날이 늘어서고
この地の貧しい民	이땅의 가난한 百姓
甕の中の黄色い満洲栗の実を水であらうとき	한 옹기의 싯누른 淸조알을 담거씻을때
丸裸の幼子の　痩せこけたあばら骨を■■映し出すとき	헐 벗은 어린애 앙상한 갈비때를■■빛일때
もどかしそうに泥水も渦巻き	안타까운듯 흙물도 뱅뱅이치며
お前も共にため息ついた普通江	너도 같이 한숨진 普通江
土城の堤にポプラの木　雨風に	土城뚝에 포푸라 비ㅅ바람속에
むせび泣くとき	흐느득일때
恨みに満ちたこの地を一口で呑み込もうとでもするように	怨恨에 찬 이땅을 한ㅅ입에 삼키려는듯
怒りの声をあげたお前　普通江	怒呼하던 너 普通江
この地のこの民は　新しい国を得たのだから	이땅의 이백성 새나라 받았으니

歌うように安眠せよ
お前の流れるこの地
それもまたお前の国なのだ
2
見ているか　普通江
お前の頭に月桂冠のように輝く
新しい国の旗を
見ているか
逞しいシャベルの行列
土嚢の円舞
水路を埋め尽くす人民の波
3
聴いているか　普通江
歓びに満ちた作業場の歌
泥土を抱く笑い声
晴れた空を揺るがすエンヤコラ
4
しかし普通江
お前は知っているのか
ひとかきひとかき掘っては積み上げるあの
　シャベルの歴史を――
倭奴（ウェノム）に鞭打たれて穴を掘った
あのシャベルだった
食べさせられず死なせた子　着せるものもなく
裸ん坊のまま胸に抱き
共同墓地に背負っていったあのシャベルだった
陽の差さない四坪の庭に
夕飯にしようと　しなびたネギの根
植えかえたあのシャベルだった
倭奴（ウェノム）の仕事場に連れて来られて
ぶるぶるわなわな身を震わせ

노래하듯이 기리 잠자라
네 흐르는 이땅
亦是 네 나라러라
2
보느냐 普通江
네 머리위에 月桂冠처럼 빛나는
새나라의 기ㅅ발을
보느냐
우람찬 부삽의 行列
흙짐의 圓舞
도랑을 매운 人民의 물ㅅ결
3
듣느냐 普通江
기꺼움에 찬 일터의 노래
진 흙을 안은 웃음 소리
맑은 하늘 뒤흔드는 영치기영
4
그러나 普通江
너 아느냐
한웅쿰 한웅쿰 파 얹는 저－부삽의
　歴史를――
왜놈의 챗질아래 따ㅅ굴을 파던
그 부삽이었다
멕이지못해 죽인 애 입힐것없이
벌거숭이채 가슴에 안고
공동묘지로 떠메어나가던 그부삽이었다
네秤자리 해또 안드는뜰안에
저녁끼니 대려고 시드른 파뿌리
떠옴기던 그부삽이었다
왜놈의 일터로 끌려나와
부뜰고 와들와들 몸서리치며

歯ぎしりした反逆のあのシャベルだった	이들 같은 反逆의 그부삽이었다
そのシャベルがまるで山の獣のように	그부삽이 마치 산슴생처럼
あの家この家　この曲がり角　あの床の下	이집저집 이모룸이 저마루아래
その穴倉の中から	그 움속으로부터
雄叫びをあげ　列を成してゆく	소리치며 行列짔고나와
踊り突撃するシャベルよ　お前も	춤추며 돌격하눈 너 부삽도
祝福を受けたのだな	祝福을 받았고나
5	5
うねり流れて悠久万年	구비쳐 흘러　悠久萬年에
お前も四十年を涙で過ごしたことだろう――	너도 서러운 四十年 눈물로 흘렀거니――
名を呼ぶだけでも恨み多い普通江よ	이름만 불러도　恨많은 普通江
この日からはため息と涙の	너 이날부터 한숨과 눈물의
歴史を閉じよ	歴史를 거두라
幸福な普通江	幸福된 普通江
この祝福されたわたしのシャベルを受けよ	이 祝福된 내 부삽을 받으라
（一九四六年二月十六日）	（一九四六年二月十六日）

注

1）南宮満談「北朝鮮演劇運動의　過去一年間을　回顧하며（北朝鮮演劇運動の過去一年間を回顧して）」『朝鮮新聞』1947 年 1 月 3 日付，3 面。玄秀『赤治六年의　北韓文壇（赤治六年の北韓文壇）』国民思想指導院，ソウル，1952 年，p.33。本書の著者「玄秀」は，詩人朴南秀（1918. 5. 3～1994）のペンネームである。朴南秀は平壌に生まれ育ち，解放後もソ連軍政下の北朝鮮で活動，建国後も同地で作品を発表していたが，朝鮮戦争時，1951 年のいわゆる 1・4 後退時に越南した。なお，引用文献の発行所は，基本的に北朝鮮及び朝鮮民主主義人民共和国のものであるため，それ以外の場合のみ表記することとする。

2）「出版界散歩」『民聲』第 3 巻 1・2 号，民聲社，ソウル，1947 年 2 月，p.20。

3）徐光霽，『北朝鮮紀行』青年社，ソウル，1948 年，p.98。

4）南宮満　談。注 1）に同じ。

5）『文化戦線』創刊第一輯，北朝鮮藝術總聯盟，1946 年 7 月，pp.114～115。なお，これが詩「勝利의　記録（勝利の記録）」の初出である。後述する詩「흘러라　普通江　새 歴史의 한복판을（流れよ　普通江　新しい歴史の真ん中を）」ともども，2003 年に出版された『李燦詩全集』（ソミョン出版，ソウル）の「作品年譜」には，1947 年刊の李燦詩集『勝利の記録』収録とあるのみであるが，2013 年に出版された李相淑編『북한의

시학연구（北韓の詩学研究）1　詩』（ソミョン出版）には，『勝利の記録』に先立ち，『文化戦線』創刊号（1946. 7）と，解放 1 周年紀念詩集『巨流』（1946. 8. 15）が表示されている。しかし，このよく調べられたアンソロジーにも，『普通江』への言及はない。なお，この『巨流』を含む，一連の解放 1 周年紀念作品集に関しては，拙稿「一九四六・八・一五，平壌－詩集『関西詩人集』と九種の解放一周年紀念作品集から見えてくるもの－」（『朝鮮学報』第 262 輯，2023. 12. 26）を参照されたい。

6）『青丘学術論集』第 19 集，財団法人　韓国文化研究振興財団，東京，2001 年。

7）拙稿「覚書」pp.158～159。および注 104, 105。

8）同上，注 105, p.194。

9）筆者は，2022 年 10 月 1 日（土）に行なわれた朝鮮学会で「一九四六・八・一五，平壌」と題して，一連の解放一周年紀念作品集を中心とした公開講演を行なった。内容は本共同研究とも関連するもので，講演の原稿の準備は，本共同研究の準備と並行して進められた作業であったが，本研究のオリジナリティを尊重して，この新しく発掘された本資料についてはあえて触れていないことを付記しておく。注 5）も参照のこと。

10）前掲「覚書」，注 104, p.194。

11）南宮満　談。注 1）に同じ。

12）前掲『文化戦線』創刊第一輯，1946 年 7 月，p.14。また拙稿「覚書」p.157 および脚注 100 も参照されたい。

13）『正路』1946 年 7 月 16 日，金光雲編『北朝鮮実録』第 4 巻，図書出版ソニン，ソウル，2018 年，p.112。

14）前掲，玄秀『赤治六年の北韓文壇』p.33。

15）同じ時期，すなわち 1946 年 8 月 15 日に，解放 1 周年紀念として同時に刊行された詩アンソロジーとして，『北風』と『永遠한　握手（永遠なる握手）』があるが，どちらも収録者名が玄秀の記述と一致しない。

16）普通江改修工事とは関係はないが，「土城廊」という名を付した作品として，南宮満による単幕戯曲「土城廊風景」が『文学芸術』第 9 号（1949 年 9 月 10 日）に掲載されている。編集後記によれば，この作品は，職場や農村のサークルで上演されるべく書かれたもののようである。

17）詩の末尾に「（一九四六年六月）」とある。なお，これがこの作品の初出である。これはその後，1946 年 8 月 15 日に解放一週年紀念として出版された詩のアンソロジー『巨流』（八・一五解放一週年記念中央準備委員會　発行）に再録されている。このどちらも，よく調べられた大村益夫の「金朝奎　작품연보（作品年譜）」（同氏著『中国朝鮮族文学の歴史と展開』緑蔭書房，東京，2003 所収）にも含まれていない。

18）この詩「勝利の記録」もすでに知られたものであるが，この『文化戦線』への掲載が初出である。のち『巨流』に再録された。前掲『李燦詩全集』の「作品年譜」には 1947 年刊の詩集『勝利の記録』収録とあるのみである。なお，この『全集』の「年譜」は，解放前分で，例えば日本語作品が落ちている，解放後分では，北での作品活動で欠落部

分が少なくないなど，不充分なところが散見される。前掲『李燦詩全集』。本稿注 5）も参照のこと。

19）この時調や李燦，金史良の詩の日本語訳は，早稲田大学講師の近藤友梨氏による下訳を，水野直樹，谷川竜一，布袋敏博が共同で検討したものである。したがって文責はこの 3 名にある。

20）この詩には，1946 年版（本冊子『普通江』掲載詩），1947 年版（李燦の個人詩集『勝利の記録』版），1958 年版（『李燦詩選集』版）がある。1958 年版では大きく改作がなされ，詩のタイトルそのものが「흘러라　보통강　노래처럼　그림처럼（流れよ　普通江，歌のように　絵のように）」となっている。なお，全 100 巻予定で現在も刊行中の『現代朝鮮文学選集』の第 55 巻「1940 年代詩選（解放後篇）」（2011 年 8 月 25 日発行）にもこの詩が収録されているが，これは 1958 年版を踏襲している。ただ，1958 年版の詩末尾には「1946」，2011 年版の詩末尾には「1947」とある。これは前者が，今回発掘された冊子（『普通江』）に，後者が 1947 年刊の『勝利の記録』によっているということを意味しているのだろうが，1958 年版で大きく改作されているので，その意味ではどちらも正確ではない。むしろこの作品は，1946 年版と 1958 年版の 2 種があり，その比較検討が必要だと捉えるべきだろう。

21）初伏，中伏，末伏の夏の特に暑い時期。

22）古来中国で，天を九つの方位に分けた称。

23）「その名は真の～光明が訪れ」までが，1958 年版では，「その名は／三千万の知恵であり光明である朝鮮労働党／その手の指し示すところに／すべての暗黒は消え去り（그 이름은／三천만의 지혜며 광명인 조선 로동당／그 손길 가는 곳에／모든 암흑은 사라지고）」となっている。

24）「ああ　その力は～人民の力！」までは，1958 年版では「その力はそのまわりに／人民の力（그 힘은 그 두리에／인민의 힘）」となっている。

25）5 月 14 日段階の予定では，5 月 17 日から市民の動員を開始し，76 日間をかけて 7 月 31 日に竣工することになっていた。実際は，工事は若干遅れて，5 月 21 日にはじまったものの，7 月 15 日に工期を短縮させて終えることとなり，工期短縮自体が市民たちの力の結集による成果として顕彰された。

26）「ああ　輝く～その力とともに」の 2 行は，1958 年版では削除されている。

27）この「流れよ！　普通江」のすぐ後ろに，1958 年版では，「うねろ　普通江（흘굽이쳐라，보통강）」を加えている。

28）1958 年版では，最後の 2 行が，「花咲く祖国の山野を／歌のように　絵のように…（꽃피는 조국의 산야를／노래처럼 그림처럼…）」となっている。

29）李燦の作品に対し，金史良の作品（即興詩と戯曲），「蓮花里一市民」による時調は，この冊子『普通江』に掲載されたのみで，他の場所に再録・発表された痕跡はない。なお，これら本冊子収録作品のうち，紙幅の関係上，金史良の詩のみ，原文を本稿文末に掲げる。

30）李燦作品のこうした特徴は，ほかにも見出すことができる。たとえば，1946 年 8 月 15 日に一斉に刊行された解放 1 周年紀念作品集（またそれらを刊行した行為自体）は，重要な意味を持つものだが，その中の一冊，『金日成将軍讃揚特輯　われらの太陽』に李燦は 2 篇の詩を発表している。そのうちの一つ「金日成将軍의　노래（金日成将軍の歌）」は，金元均により曲が付けられたもので，まず『文化戦線』創刊号（1946. 7）に発表され，それが『われらの太陽』に再録されているのだが，さらには『朝鮮女性』創刊号（1946. 9）にも再録されている。その後も機会あるごとに歌集などにも収録されているものだが，当局の意にかなうものとして繰り返し取り上げられることが多いのが，李燦の作品の特徴であり，注目すべき点であると思われる。金史良の作品がたびたび批判を受けているのと，きわめて対照的である。

31）注 6）に同じ。

32）ここには，脱稿に近づいたとのみ伝えられている戯曲「흙（土）」，金達寿の回想「戦死した金史良」に出てくる戯曲「地熱」，および 1987 年版［『金史良作品集』］のチャン・ヒョンジュンの解説文「作家金史良とその文学」で触れられている随筆「少年鼓手」は，作品の存在そのものが確認できないため，含めていない。また，「駑馬萬里」の初出版［『民聲』連載版］と 1955 年版（『金史良選集』）は別のものとして数えた。「覚書」脚注 9 に同じ。

33）これについては，拙稿「초기 북한문단 성립 과정에 대한 연구－김사량을 중심으로－（初期北韓文壇の成立過程についての研究－金史良を中心に－）」，ソウル大学校博士論文，2007 年を参照のこと。

34）これらについては，白川豊の論文「佐賀高等学校時代の金史良」『朝鮮学報』147 輯，天理，1993. 4 を参照のこと。この論文は，佐賀高等学校時代の金史良（当時は本名の「金時昌」）の文学活動を追ったもので，大きな発見となった。合わせて，渡日以前に本名の「金時昌」名で新聞投稿していた金史良の朝鮮語による習作を発掘した。『毎日申報』や『東亜日報』，『東光』に掲載された 26 篇の童謡，2 篇の童話（いずれも朝鮮語），佐賀高校文芸部の『創作』第 9 集に掲載された 2 篇の詩「苦悶」，「凍原」，卒業記念誌に掲載された小説「荷」（いずれも日本語）などを紹介したほか，『朝鮮日報』に連載された「山寺吟」や，『東亜日報』に連載されたルポ「山谷의　手帖－江原道에서（山谷の手帖－江原道で）」（いずれも朝鮮語）を発掘，紹介している。

35）この作品は，『金史良全集』第 1 巻（河出書房新社，東京，1973）に収録されている。

36）引用は，安宇植作成の「金史良年譜」1941 年の項より再引。『金史良全集』第 4 巻，1973, p.389。

37）1941 年 11 月に創刊され，1945 年 5 月まで，計 39 冊刊行された。主幹は崔載瑞（のち創氏改名して「石田耕造」）。植民地末期，朝鮮では，時局にあらがうかのように，文学者たちが力を結集して，金錬萬を編集兼発行人とする『文章』（1939. 2～1941. 4，通巻 27 号）と，崔載瑞を編集兼発行人とする『人文評論』（1939. 10～1941. 4，通巻 16 号）という 2 冊の文学総合雑誌を刊行する。しかし，1940 年 8 月 10 日をもって『東亜日報』

と『朝鮮日報』という 2 大新聞が強制的に廃刊され，ついで『文章』と『人文評論』も，もう一つの雑誌『新世紀』との統合をもちかけられる。『文章』主幹だった李泰俊はこれに抵抗して自主廃刊を選ぶ。その結果として 3 誌を統合した形で新たに創刊されたのが，この『國民文學』である。当初，「國語（日本語）版」と「諺文（朝鮮語）版」の刊行を謳ったが，創刊号（国語版，1941. 11）に続く 1941 年 12 月に予定されていた「諺文版」は，原稿が集まらず，休刊になった。そしてほどなく，『國民文學』誌は「日本語版」のみの刊行となる。植民地末期の「国民文学」を主導した核として君臨したこの雑誌に執筆するということは，ある意味で「転向」にも似た行為であったといえる。金史良は，「ムルオリ島」に続いて，ほぼ 1 年後の 1943 年 2 月から 10 月まで，再び同誌に日本語長篇「太白山脈」を連載する。しかしこの両作品とも，時局的な内容は皆無である。「ムルオリ島」は郷土色溢れ，ロマンチシズムに彩られた短篇であり，「太白山脈」は，韓末を時代背景に，甲申事変に失敗し，山中に逃げ込んで火田民になっている尹天一と，彼の周辺に集う若者たちの行動を描いた，スケールの大きいロマンである。「太白山脈」には，金玉均一派を登場させているが，これは検閲を意識してのことと思われる。こうした作品を書くことが，金史良としてできる限りの抵抗であったのだろうが，しかしそうした抵抗にも限界があった。海軍視察とその報告書ともいうべき作品の発表にいたって，金史良は脱出の意思を固めたのではないだろうか。

38）3 月の「土地改革法令」に関して，李泰俊が「農土」（1947）を，李箕永が「土地（上篇開墾）」（1947）を発表しているが，金史良も「馬息嶺」を書いている。この作品は『風塵』（1948）に収録されているが，初出がまだわかっていない。「労働法令」と関連する「チャドルの汽車」も初出不明である。どちらも，最初の発表時期がわからないため，確言は出来ないが，『風塵』の「あとがき」から，法令が出された直後に書かれたものと推測できる。そう考えると，この普通江改修工事に関係する 2 つの作品が，太行山中で構想された作品を離れ，北朝鮮の現実に即して書かれた最初の作品であるとはいえないが，太行山中で構想されたものから，徐々に北朝鮮社会の現実を反映させたものに移行していく過程の最初期の作品であるということは言えるだろう。

39）前掲，徐光霽，『北朝鮮紀行』，p.98。

40）南宮満談「北朝鮮演劇運動の過去一年間を回顧して」，注 1）に同じ。ただ，当日は，大雨が降ったようで，屋外で上演するのは難しかったと思われる。そうした点を鑑みると，最初から屋内での上演が予定されていたのではないだろうか。

41）表題は，7 月 21 日の慶祝大会での公演時には，「야단이의 일년감（ヤダニのトマト）」だった。前掲，南宮満談。

42）朴宗軾「創作上에 있어서의 테마에 대한 몇가지 문제（創作上においてのテーマに対するいくつかの問題）」『民主朝鮮』第 647～648 号，1948 年 7 月 8～9 日付，「覚書」pp.165～166（注 141, pp.199～200）および，韓暁「보다 높은　成果를　向하여－九四九年度　小説界의　回顧－（より高い成果に向かって－一九四九年度小説界の回顧－）」『文学芸術』第 3 巻第 1 号，1950 年 1 月，pp.171～172（注 171, p.202）など参照。

43）土城廊や普通江については，「海の歌」でもごく断片的に描かれている。『金史良全集』第 3 巻，1974 年，pp.501～502。本稿 3-2-1「解放前後からの金史良の行動と作品活動」で述べたように，「海の歌」は，『毎日新報』に 1943 年 12 月 14 日から 1944 年 10 月 4 日まで連載された朝鮮語の長篇小説である。作品を見ると，約 11 カ月の長期にわたって書き続けるのに，金史良は持てる材料を総動員している様子がうかがえる。たとえば，登場人物の名前ひとつとっても，コブタンネは短篇「コブタンネ」（初出未詳だが，1940 年に刊行された第 1 創作集『光の中に』に収録されている）の主人公名であるし，チャドリ（次■（石の下に乙））やボットリなど，解放後の作品に再度顔を見せる名前もここにはある。名前については，次の，「4.2.4　登場人物と「名」」で触れる。この植民地末期に発表された長篇「海の歌」は，植民地末期，『毎日新報』に発表されたプロパガンダ的な作品というイメージだけで捉えられ，これまでほとんど正面から取り上げられてきていないが，きちんと分析される必要があるように思われる。

44）黄東軾「朝鮮芸術座의　第一回公演을 압두고（朝鮮芸術座の第一回公演を前にして）」『朝鮮日報』1935 年 11 月 25 日付夕刊，第 3 面。拙稿「解放後の金史良覚書」，pp.195～6 も参照のこと。

45）朝鮮芸術座は，在日本の朝鮮人観客を相手に，朝鮮語による舞台上演を行なっている。日本語で書かれた，しかも小説である金史良の作品を取り上げようとするならば，朝鮮語に直し，さらにそれを台本化するという，たいそう手間がかかることになる。そのことを考えると，なおさら金史良の短篇小説「土城廊」を取り上げることは困難であったはずである。なお，1936 年春に東大に進学した金史良は，朝鮮芸術座に「座員」として関わった。1936 年秋に朝鮮芸術座関係者が検挙された際，金史良（金時昌）も検挙されている（『毎日申報』1936 年 10 月 31 日）。

46）『民聲』第 3 巻第 1・2 号，民聲社，ソウル，1947 年 2 月，pp.6～15。

47）いまこれらの名前すべてに触れる余裕はないが，戯曲「カムドルのトマト」の主人公〈カムドル（깜돌）〉を例にとると，「トル（돌）」は「石」の意味で，「－돌이」で男性を表わす名前を作るが，「돌[3]」の⑤には，「頭の悪い人をさげすんで呼ぶ言葉」ともある（ハングル学会編『우리말 큰 사전』第 1 巻，語文閣，ソウル，1992, p.1085 左）。つまり，文学作品などで，きわめて強固な階級社会で，身分差に厳しい朝鮮にあって，身分が低く，充分な教育を受けられなかった登場人物を表わす場合などに使われている。〈チャドル（돌）〉も同様である。

48）この前年，日本では金達壽により『金史良作品集』（理論社，1954）が追悼集として編まれている。『金史良選集』の刊行には，これが刺激となっているかもしれない。

49）こうした例は，たとえば，普通江改修工事完遂の直後，解放 1 周年を記念して出された『金日成将軍讃揚特輯　われらの太陽』所収の李燦の詩「金日成将軍の歌」や韓雪野の短篇「血路」と，金史良の戯曲「雷聲」の場合にも見られる。注 30）参照。

（第 21 期第 9 研究会による成果）